

# 川辺川ダム(流水型)では 命も清流も守れない！



県知事への抗議(NHKニュースより)2020.11.13

7月4日の球磨川豪雨災害から2か月も経たない8月25日、国土交通省は「球磨川豪雨検証委員会」を立ち上げ、わずか2回の会合で「仮に川辺川ダムがあれば人吉市の浸水面積を6割減らすことができた」と結論付けました。

それを受け、蒲島知事は昨年11月、「川辺川に流水型ダムの建設

を求める」と表明。国交省は「球磨川流域治水協議会」を立ち上げ、川辺川ダム建設を中心とする治水対策を検討しています。

7月4日の豪雨で人吉では20名の方が亡くなられましたが、全てが支流の氾濫によるものであり、亡くなられた場所と時間を詳細に検証すると、仮に川辺川ダムが効果を発揮したとしても命を救うことはできませんでした。

川辺川ダム建設に対し、その最大の「受益者」であるはずの多くの豪雨被災者はダム建設を求めています。ところが国土交通省は、お一人お一人の亡くなられた原因も検証せず、被災者や住民の意見も聞かず、公開質問状にも一切答えず、住民に何の説明もしないままダム建設を強行しようとしています。

今回の豪雨では、球磨川の多くの橋が洪水に飲み込まれましたが、川辺川ダム建設予定地のすぐ上流と下流にある、古くて小さな2つの吊り橋が、流されずに残っています。このことは、川辺川上流の雨量は中流域に比べて少なく、川辺川ダム地点の流量も少なかった動かぬ証拠です。仮に川辺川ダムがあっても、効果が発揮できなかったのは明らかです。

川辺川ダムでは命も清流も守ることはできません。限られた国の予算は、これまで長年放置されてきた河道に堆積した土砂の撤去や森林の保全など、誰もが賛同し、すぐにでも開始できる事業にこそ投入すべきです。

## ●2020年7月～2021年1月の主な出来事・活動報告

- 20. 7. 4 線状降水帯による空前の豪雨で、球磨川がかつてない氾濫
- 8. 23 住民による「検証7月4日球磨川大水害」(熊本市)に70名参加
- 8. 25 国、県、市町村による第1回球磨川豪雨検証委員会
- 8. 31 検証委員会に対し「ダムありきで住民不在」と抗議文を提出
- 9. 28 地元市町村でつくる川辺川ダム建設促進協議会(会長・森本完一錦町長)がダム建設を含めた治水対策を国交省に要望
- 9. 29 「7・4球磨川流域豪雨被災者の会」が人吉市で設立
- 10. 3 第24回清流川辺川現地調査シンポジウム(八代市)に150人参加。
- 10. 6 第2回球磨川豪雨検証委員会が「仮に川辺川ダムがあれば浸水面積を6割減らせた」と結論付け、2回で検証を終了
- 10. 12 球磨川豪雨検証委員会に関する公開質問状を国や県などに提出
- 10. 15 蒲島知事が流域の意見を聴く会の開催を始める
- 10. 26 球磨川流域治水協議会に関する抗議と要請を国や県などに提出
- 10. 27 国、県、市町村による第1回球磨川流域治水協議会
- 11. 9 球磨川の治水協議に関する抗議と公開質問(追加)を提出
- 11. 13 蒲島知事に川辺川ダム容認方針に対する抗議文を提出
- 11. 19 蒲島知事が県議会で川辺川に流水型ダム建設を求めると表明
- 11. 22 「流水型川辺川ダムでは命も清流も守れない」と住民が熊本市で抗議集会とパレードを開催(350人参加)
- 12. 18 第2回球磨川流域治水協議会で国交省が流水型ダムにゲートを付ける案を提示(※太字は行政側の動き)
- 21. 1. 5 球磨川流域治水協議会に対し意見書を提出

## ●球磨川の防災対策で進めるべきこと

1月5日、手渡す会など3団体が球磨川流域治水協議会に提出した意見書で提案した球磨川の防災対策に中からいくつかを紹介します。

### ①河道掘削

河道掘削は、ダムによる洪水調節よりも確実に洪水水位を下げるすることができます。国土交通省は今後、平水位までの掘削を行うとしていますが、長年の土砂の堆積で河床自体が上昇しています。平水位までの土砂撤去とともに、可能な河床掘削を行い、平水位も下げるべきです。人吉市では中川原のスリム化、もしくは撤去も検討すべきです。

### ②人吉市などでの防水壁の設置

可搬式堤防などの防水壁は治水施設ではなく、国交省の構造基準を満たさない一時的なものとされます。しかし、避難に必要な時間を稼ぐことや、住宅の浸水を防ぐことが可能です。ドイツなどヨーロッパでは可搬式堤防の実施例も多く見られます。検討と実施に時間を要する対策が実施されるまでの間、浸水を防ぐために非常に有効です。



ヨーロッパでの防水壁の設置例(「IBS簡易洪水防水壁」ホームページより)

### ③瀬戸石ダムの撤去

瀬戸石ダムの構造物は、今回の豪雨時に球磨川の断面積の約65.9%の流れを妨げています。瀬戸石ダムが洪水水位を大きく押し上げ、ダムの上下流の被害をかなり大きくしたことは明らかです。球磨川流域治水協議会の資料からも、全ての対策を実施した後も瀬戸石ダム周辺では洪水水位が堤防高を上回っています。対策は、瀬戸石ダムの撤去しかありません。

### ④浸水地区の高台移転・宅地かさ上げ

今次洪水で浸水した地区では、高台移転や宅地かさ上げを積極的に進めるべきです。かさ上げの高さは、今次洪水の水位とすべきです。高台移転、宅地かさ上げ等に必要な費用は全て公費負担とすべきです。

### ⑤森林の保全(シカ対策、放置人工林の間伐、土砂の流出を押さえる対策)

今次豪雨では至る所で山腹崩壊が見られ、流出した土砂や岩石、流木等が支流をうずめ、被害を拡大させました。球磨川流域の森林の状況を見ると、至る所で皆伐が行われ、間伐等がされていない放置人工林も多くみられます。巨大ダムをつくる予算があれば、一刻も早く森林の保全に予算を投入すべきです。

### ⑥田んぼダムの推進

水田の排水口を絞って排水量を調節して水をためる田んぼダムは、新潟県で取り組まれ、低コストで効果が高いことが実証されています。森林の保水力や田んぼダムの治水効果も評価し、数値化すべきです。

### ⑦支流をゆっくり流すための対策

改修以前の状態に近づけて、遊水空間を確保するなど、洪水をゆっくり流せるようにします。地元の賛同が不可欠であり、それらの対策で農地などが被災した場合は十分な補償を行うべきです。

※1月5日に提出した意見書と説明資料は下記で見ることができます。

<http://kawabegawa.jp/ogt/ryuukitisisuikennsyo2021.1.5.pdf>

<http://kawabegawa.jp/ogt/ikennsyosetumeisiryou2021.1.5.pdf>

## ●流水型(穴あきダム)では命も清流も守れない！



益田川ダム(島根県)を下流から見た写真

蒲島知事は昨年11月19日、流水型の川辺川ダム建設を求めると表明しましたが、流水型ダムでは命も清流も守れません。

左は、流水型ダムである益田川ダムの写真です。国内には5つの流水型ダムが運用されていますが、いずれもダムの上の方に、緊急放流をするための大きな穴がいくつも並んでいます。

流水型ダムでも想定以上の雨が降った場合、ダムは満水になります。

その場合、ダムに流れ込む洪水をそのまま下流に流すので(緊急放流)、ダムの放流量が一気に増加し、ダム下流の水位は一気に上昇します。

洪水時の河川は、多量の流木や土砂、岩石などを押し流します。流水型ダムの最大の弱点は、河床と同じ高さの穴が、洪水時に流れる流木や岩石等でふさがってしまうことです。国内の流水型ダムはいずれも、流木や岩石が穴に入り込まないように、穴の上流側は20cmのすき間のスクリーン(柵)でおおわれています。洪水時にスクリーンにはりついた流木等が穴をふさぐのは明らかです。穴がふさがれば、洪水調節できなくなるのはもちろん、ダム周辺や下流は大変危険なことになります。

流水型ダムは洪水時、ダムの上流に土砂や岩石等を大量にため込み、洪水が終わった後は、たまった土砂が露出して流れ出し、川の濁りが長期化します。また、ダム下流への砂礫の供給はなくなり、岩盤の露出など河川環境に大きなダメージを与えることは明らかです。

高さ約108mの流水型川辺川ダムの穴(トンネル)の長さは100mあまりになると推測されます。ダムの上流には流木防止用のスリットダムが、ダムの下流には放流を受止める副ダムが造られると推測されます。これでは魚類も遡上できないのは明らかです。

**編集後記** これまで2回開かれた球磨川流域治水協議会を、オンライン中継の傍聴会場を訪れ傍聴しました。会議の日時などの事前予告もないため、オンラインの傍聴会場に訪れる市民もほとんどいない状況です。流域治水とは、流域のあらゆる力を集めて豪雨災害を防ぐ、という考え方です。しかし、流域治水協議会のメンバーは国土交通省など行政関係者ばかりであり、最大の関係者であり受益者であるはずの被災者や住民は除外されています。誰のための流域治水、そして誰のための流水型ダムの建設なのでしょう？(N.O.)